一

鄭容慎（ていようしん）から電話がかかってきたとき、私は私の部屋の大学院学生が来週教授に提出することになっている、学位論文に目を通していた。それは、「ポリ－α－アミノ酸の反応物性」と題する、英文の、かなり長いものであった。私の所属しているこのG研究室では、合成高分子の触媒作用を調べることにより、生体内における酵素作用の機構を解明しようとしているのだが、この論文に報告されている研究は、そのテーマの一環を成すものであった。同時に、それはまた、ポリ－α－アミノ酸、つまり蛋白質のモデル物質を合成するという、かつて私が東京の大学にいた当時取り組んでいた研究の、延長線にあるものでもあった。私は、あの瓢簞型の小さな池を見下ろす研究室で過ごした、自分の大学時代のことをときどき思い出したりしながら、その論文を読んでいたのである。

そうしたときに、鄭容慎からの電話を受けたのである。鄭容慎は東京の大学時代にしばらく一緒に実験したことのある、韓国出身の旧友であった。つまり、彼は私と同じく応用化学科の出身なのだが、大学を卒業すると同時に化学を放擲（ほうてき）してしまい、いまはある政治運動に身を投じている。その彼が、ある用事で青森に行くところなのだが、仙台で途中下車したので、これから私のところに訪ねてくるという。

私にとって、それはまったく思いがけない、突然の電話であった。何しろ、彼とは年に一度賀状を交換するぐらいのもので、もう八年も会っていないのである。受話器の彼方（かなた）から不意に彼の、特徴のある太い声が聞こえてきたとき、私は一瞬、その電話が東京の、それもあの大学の構内からかけられているような錯覚を覚えた。彼の声が、一緒に実験していた、十年近く前の時間の彼方から聞こえてくるような気がした。

受話器を置くと、私は思わず深く息をついた。ほう、あの鄭容慎がね、と私は頬の豊かな、少し童顔の感じを漂わせている彼の顔を思い出し、懐しかった。同時に、さまざ

まな思いがにわかに私の中に立ちこめてき、私の心はもはや論文の内容から遠く離れてしまった。

私は煙草に火をつけ、窓の外を見やった。窓のすぐ外に、すでに葉の落ち尽したメタセコイアの木があり、その窓の風景の中に、さっきから雪の細片がちらちら舞い落ちはじめていた。風はなく、澱んだ空間の中を、雪は踊るように、ゆっくりと舞い落ちていた。ついいままで隣りの机に向かっていた技官の佐伯は、図書室に行き、部屋の中は私一人だった。その静かな部屋の中で、私のすぐ後ろのガストーブだけが、弱い音を微かに響かせている。

窓の外を見やりながら、私はゆっくりと煙草を吸った。鄭容慎の声を耳にした途端、妙に心がざわめきはじめているのを、私は感じていた。鄭容慎と一緒に実験していた、あのドデシルベンゼンスルホン酸ソーダの頃のことが、ドデシルベンゼンの、あの胸をむかつかせる独特の臭気とともに、私の中に噴き出してくるようであった。そして、なぜかそれが私を落ち着かぬ気持にさせるのである。これは、何なのか。心の襞々から、私を脅やかすようににじみ出てくる、この感情、この為体の知れぬざわめきは、いったい何なのか。

私は煙草を手にしたまま、窓の外の葉のないメタセコイアの枝に、じっと目を凝らしていた。

専門課程に入った三年の後期は、午前は講義だが、午後はすべて実験になっていた。半年たらずのあいだに、「物理化学実験」、「化学工学実験」、それに「有機化学実験」などの日程がびっしり詰っていたために、それは多忙を極めた一時期であった。殊に最後の「有機化学実験」の二カ月間は、時間のかかる実験ばかりがずらりと並んでいたために、その一年後の卒業論文の締切り直前とともに、大学四年間の中では最も忙しかった二カ月間であった。

あのとき、あの中川という若手の助教授は、なぜあのようにも多忙な日程を課したのだろうかと、私はいまでも考えることがある。実験とはそのように厳しく、多忙なものであることを理解させるための、一つの訓練として課したのだろうか。しかし、あれは少し無茶というものではなかったろうか。アクティブな俊英といわれ、異例なほど若くして助教授に就任した彼の、いわば一種の思い上がりから組まれたスケジュールではなかったろうか。あのときの中川助教授と同じほどの年齢になり、助手として学生に実験を課す仕事も担当している私には、いまもそう思われてならないのである。

実験時間は一応午後一時から五時までとなっていたものの、「有機化学実験」として課せられた十数種目の実験のうち、一つとして所定の時間内に終るものはなかった。といって、翌日にはまた別の実験が控えていたから、どんなに時間がかかっても、その日の実験はその日のうちに済ませなければならなかった。クラスのほとんどの者が、その頃、たいてい夜の七時頃まで居残って実験を続けていた。途中で何かミスでもすれば、その分だけ遅れる。そして、八時を過ぎてもまだ帰れない者が何人か出てくる。そんな連中に向かって、あるとき実験室に巡回に来た中川助教授は、こういったものだった。

「この部屋は十一時まで開いていますから、あわてないでやって下さい」

その頃、私は週に三度家庭教師のアルバイトをしていたから、その多忙な日程は、ひとしお身に応えた。アルバイトのある日は、私は少しでも早く実験を終えられるよう、学生食堂で昼食を済ませると、一時の始業時間を待たずに、数十の実験台が数列に並んでいる、あのだだっ広い学生実験室に行き、実験を始めた。私にかぎらず、あのときはクラスの多くの者が、そのように始業時間前から実験を始めていた。

五、六時間かかってようやくその日の実験を済ませると、私はまたそそくさと地下の学生食堂に急ぎ、マカロニだけは確実に添えられている定食の夕食をあわただしく食べ、バスと電車を乗り継いでバイト先へと急ぐ。高校の生徒を二時間教え、またバスと電車に一時間あまり揺られて世田谷の下宿に帰り着くと、もうたいてい十一時半を過ぎている。が、部屋に落ち着くと、私はほっと一息つく間もなく、当時毎日のように宿題になっていた、「化学工学単位操作」の演習レポートに取りかかる。

三年の後期が多忙だったのは、午後の実験が主要な原因だったが、同時に午前の「単位操作」の講義も、それに拍車をかけていた。一日おきに「単位操作」の講義があり、しかもその大部分は演習で、その演習問題がまた、一問解くのに一時間も二時間もかかるようなものばかりだった。数問の問題のうち、講義時間内に解けるのは一問か二問で、残りは宿題ということになり、次の時間にレポートとして提出しなければならなくなる。真面目に宿題を処理しようとすると、毎日二、三時間もの時間をそれにかけねばならないので、クラスの大部分の者は、数人の友人同士で同盟を結び、当番に当たった者だけが問題を解いてき、あとの者はそれを丸写しにして、レポートを作る。しかし、友人らしい友人のいない私は、そんなこともできなかった。そのレポートを、私は、アルバイトから帰ってからの時間に作るのであった。それの終ったときには、もうしばしば二時にも三時にもなっている。私はすっかり疲れ切り、何を考える余裕もなく、ほとんど年中敷きっぱなしになっている湿っぽい蒲団にもぐり込んで、寝てしまう。そして、朝には八時から始まる講義に間に合うよう、七時前には下宿を出、大学に行き、また学生食堂であわただしく朝食を掻

き込んで、教室に顔を出す。
あの頃は、私は、ほとんど息つく間もなかったような気がする。いつもあくせくしていて、始終何かに追い立てられていて、自分は何をしているのか、自分はいったい何のためにこんなことをしているのか、そういったことについて考えることもなく、考える余裕もなく、ただ自分の道はここを通り抜けて行くよりほかにどこにもないこと、なぜかそれだけは心の奥底で痛切に感じていて、この道から落伍すまいと、何か知れぬ空虚感に悩まされながらも、与えられた課業を懸命に処理し、さばいていくことでいっぱいだった。馭者に操られる馬車馬のように、私は盲目的に、ただがむしゃらに、その日その日を生きていただけだった。そうした日々のことを、私はいま、一種物悲しい、憂鬱な気持で思い返すのである。
しかし、私は、「学生実験」の最後である「有機化学実験」を、とうとう終りまでやり通すことはできなかった。「有機化学実験」の最後は、ベンゼンとドデセンから、合成洗剤であるドデシルベンゼンスルホン酸ソーダをつくる実験であった。その実験は、最終生成物を得るまでに何段階もの手順を踏まねばならないために、「有機化学実験」として続けてきた十数種目の実験の中では、最も時間のかかるものであった。それに、必要操作の中に慣れない真空蒸留が含まれていたために、最も骨の折れる実験でもあった。
そして、それが半年間続けてきた「学生実験」の最終であったために、クラスの全部の者が、最後の力を振り絞る気持で挑んで行った実験であった。
私は、その実験の最中、広い学生実験室の中で、数十の攪拌モーターが、一様に低い唸りを上げて回転している光景を、気が遠くなって行くようなぼんやりした気持で眺め回したのを、よく記憶している。あのとき、実験室の中には、どこか殺気立った、緊張した空気が流れていた。そのときばかりは雑談の声も聞かれず、皆が皆、まるでバスに乗り遅れまいとしているかのように、黙々と、ほとんど必死とさえ形容したい真剣な面持ちで、実験台に立ち向かっていた。
そう感じたのは私だけだったかも知れない。私はそのとき、性質の悪い流行性感冒に犯されていて、身体の調子を損なっていた。普通ならば休んでいるべきところを、最後だからというので、無理に大学に出、実験を続けていた。そんな私の衰弱した身体と心に、皆の凄じいばかりの緊張した勢いが、圧迫を加えてきたのかも知れない。しかも、私は、その実験の最初の段階、つまりベンゼンとドデセンからフリーデルクラフツ反応によってドデシルベンゼンを合成する段階で、失敗していた。
どこがまずかったのか、真空蒸留によってドデシルベンゼンを取り出してみると、普通は五十パーセント前後の収

率があるはずなのに、私の得たのはわずか数パーセントの、それも理論値より沸点が十度ほども低い、為体の知れぬものでしかなかった。ために私はそれを硫酸と反応させる次のスルホン化の実験に進めず、もっと多量のドデシルベンゼンを得るために、もう一度それをやり直さねばならなかった。順調に行ってさえ、時間に追われる実験だった。私は狼狽し、すぐにやり直しの実験に移り、それから三日間はアルバイトも休ませて貰い、遅れを取り戻すために、夜遅くまで残って実験を続けた。
しかし、風邪の身体で無理押しに実験を続けたのが祟ったのであろう。四日目、私は、部屋中に漂っていたドデシルベンゼンの臭気が不意に胸につかえ、吐気に襲われた。私は、あわてて中庭にでも逃れようと、部屋の出口の方に急いだ。しかし、間に合わなかった。こみ上げてくる吐気を抑え切れず、私は部屋の隅にこごんだなり、そこで吐いてしまった。
そのとき声をかけてきたのが、すぐ傍らの実験台で実験していた、鄭容慎だった。
「どうしたんですか」
と彼は近づいてくると、親切にも私の背をさすりながら、しきりに、
「大丈夫ですか」
と声をかけてきた。
彼のその親切が、私には思いがけなかった。同じクラスに学ぶ同胞とはいえ、彼と私とは、決して親しい間柄ではなかったからである。同じ朝鮮人といっても、私は日本生まれの二世だし、彼は韓国の高校を出てから日本に渡ってきた、私費留学生だった。私は、日本人学生とまったく同じ目で、彼を見ていたのである。つまり、彼は私にとっても、よその国から来た、「外国人」だった。ところが、そういう私自身、じつは日本人学生からは、彼と同じ外国人留学生として見られていたのである。私は、留学生ではない。だが日本人学生から見れば、留学生も同然なのだ。
私のその奇妙な立場は、いまでも続いている。私は、中間者であった。日本人と朝鮮人の間の中間者。それも、日本人でもあり朝鮮人でもあるというような、積極的な正の中間者というよりは、むしろ日本人でもなく朝鮮人でもないというような、消極的な負のそれだった。私は私と同胞であるはずの鄭容慎を外国人として見、その私は私自身同胞のように思っていた日本人から外国人として見られ、――そんな私は文字通りどっちつかずの人間にほかならなかった。
私と鄭容慎が同じクラスになったばかりの四月末のある日、鄭容慎が同胞として親しく私に話しかけてきたことがある。
「申淳一さんですね。チョソンサラム（朝鮮人）なんですね。

ぼく、チョン・ヨンシン、日本語でいうと鄭容慎です。よろしく」

しかし、頭を下げてそう挨拶の言葉をかけてきた彼に、私はただ当惑し、黙ったまま会釈を返しただけだった。鄭容慎にかぎらず、私は誰に対しても、極めて人づき合いの悪い人間だった。

「あなたは本籍はどちらなんですか」

私が何もいわないのを見ると、彼はこんどはそう問いかけてきた。そう問われても、そのときの私は、自分の本籍地さえ正確には答えられなかった。地番の表記が見慣れぬ漢字なので、私には読み方もわからなかったのである。

私は、ただ、「慶尚南道」とだけ答えた。すると、彼は、

「おお、慶尚南道(キョンサンナムド)！」

と大きな声で嬉しそうにいった。彼は、慶尚南道の出身なのだった。釜山のすぐ北にある何とかという町に生まれ、高校を卒業するまでそこに住んでいたということを、彼は懐し気に話した。しかし、彼が懐し気な表情を見せれば見せるほど、私はますます当惑するばかりだった。何しろ、韓国に行ったことのない私は、慶尚南道について何のイメージも持ち合わせていなかったのだから。

私は、とまどいの色を浮かべて対するよりほかなかった。そんな私を、彼は、それは私が同胞として対されるのを迷惑がっている、そのために彼を煙たがっているのだと、誤解したかも知れない。事実、私が積極的に彼に親しんで行こうとしないのを見て取ると、彼の方でもその後、一定以上私に近づいて来ようとはしなくなった。こうして、私たちは、同じクラスで毎日のように顔を合わせておりながらも、たまに目が合ったときだけ軽い挨拶を交わす程度の、ごく疎遠な関係のまま、一年近くを過ごしていたのである。

吐くだけ吐くと、いくらか胸が軽くなった。私は窓辺に行き、吹き込んでくる早春の冷たい風に顔をさらしながら、しばらくそこにたたずんでいた。吐気はおさまったものの、こんどは悪寒が私を苦しめはじめた。それ以上実験を続けるのは、もはや不可能だった。私は早退することにし、自分の嘔吐物を始末しようと、その方を見ると、それはすでに鄭容慎によって取り片附けられていた。

私は彼のところに行き、礼をいった。そして、今日は早退するから、先生が来たらその旨伝えて欲しいと、彼に頼んだ。

「顔がだいぶ蒼いようですけど、大丈夫ですか。診療所に行った方がよくはないですか。何でしたらぼくも一緒に行きましょうか」

そういう彼の厚意を、私は手を振って断り、身体の芯から揺さぶられるような悪寒に堪え堪えしつつ、やっとの思いで下宿に帰った。

その晩から三日間ほど、私は高熱にうなされつつ下宿の部屋に横臥することを、余儀なくされた。熱は三日目になってようやく引いたものの、さらに数日間はなお横臥したままで、大学に行くことはできなかった。ドデシルベンゼンの中毒症状がいつまでも残り、ドデシルベンゼンの臭いを考えただけで胸がむかついた。

そうしているうちに「有機化学実験」の日程は終ってしまい、大学はすぐに新入生向けの入学試験が行なわれるために、休校に入った。私が鄭容慎の思いがけない訪問を受けたのは、その入学試験が行なわれている最中の、ある日のことである。

よく晴れた穏やかな日和で、縁先の狭い庭に沈丁花が咲き、私は四畳半の部屋に横たわりながら、ガラス戸越しにその沈丁花を見ていた。風もなく、春らしくのどかで、私は懶(ものう)くかすんでいる空を見上げては、三年前の自分の入学試験のときも、このように静かな日だったことを思い出していた。その頃は、私の心も、ひどく静かであった。しかし、それは、この穏やかな春日和のような、内に暖かさを秘めたそれではなかった。凍てついた冬山の湖のように、表面を厚い氷で覆われた、押し殺された静けさだった。当時の私にとって、入学試験は、単に大学に入るための試験にとどまらなかった。それは、私にとって、いわば人生に通ずる門でもあった。入学試験に合格するかどうかということは、暗い郷里の家から脱出できるかどうかということであった。試験に落ちたら、自分はまたあの陰鬱な、自分と自分の生を押し潰そうとしているかのような、暗い家に戻って行かねばならない……。

午後遅く、鄭容慎が訪ねてきたことを下宿のおばさんに知らされたとき、私は一瞬、彼が私に何か用事ができたために、たとえば大学から伝達事項か何かを私に伝えるために、訪ねてきたのかと思った。まだ決して親しいとはいえない彼が、見舞いのために自分を訪ねてきたなどとは、信じられなかったからである。

だが、彼は純粋に見舞いのために訪れたのであった。それもまた私には思いがけないことだった。暗い家庭に育ったために植えつけられた習性の一つとして、他人の家を訪問することに大きな恐怖を覚えずにいられない私の目に、彼の所業はいかにも大胆に見えた。私は、開放的な彼の性格と、閉鎖的な自分の性格とを比較せずにはいられなかった。

「どうですか、身体の具合は」

部屋に入ってくるなり、彼は人なつこい笑いを顔に浮かべながらいった。そして近くの果物屋で買ったのだといって、蜜柑の包みを差し出した。

「うん、もうほとんどいいんだよ。このあいだはどうもありがとう。すっかり世話になって……」

彼は、川崎に住んでいる叔父を訪ねた帰りだといった。